グローバリズム・ナショナリズム・ポストコロニアリズム

姜 尚 中
(東 京 大 学)

姜：えーと、千葉先生の方からの整然とした発表のあとちょっと恐縮なのですが、私の方はサマリーの方は簡単に皆さんの方に出ていると思いますし、それから、私は専門的な領域でも何でもないものを書きましたので、随分ジャーナリスティックで雑駁な話しかできなくて恐縮なんですけども、そのつもりでお聞きください。

まず、グローバリズムはある程度理解できると思いますけれども、またナショナリズムも非常に難しい概念ですが…ただポストコロニアリズムというのはなかなかちょっと座りの悪い言葉になっているんではないかと思いますので、そのことがフルペーパーではぜんぜん書かれておりませんから、あとでちょっと説明したいと思います。で、先程千葉先生の方からお話があったように70年代以降から批判法学、Critical Jurisprudenceというのがでてきた。そしてまあ、ポストモダンの中でジェンダーの問題と、いわば生命をめぐる問題が出てきた、ということはおっしゃっていたわけですが、ちょうど今年1998年は実は1968年のパリの５月革命からちょうど30周年になる訳ですね。で、今フランスの方では1968年を一つの記念として様々な歴史学や、社会学、あるいは政治学、いろんな立場から一つのいろいろなシンポジウムが行われますし、アメリカでもそれが行われております。ちょうどその30年たっていわば、その1968年の、これはご承知のとおり世界的にはチェコの「プラハの春」がありましたし、また日本やアメリカ、あるいは第三世界においても様々なある種のカウンターカルチャーの運動があった時代でした。で、それから30年がたったわけですが、まあ、

そのとき問われていたこと、これは、まあ、ある学者の言葉を使えば1968年は1989年以降の大きな変化のリハーサルであった、つまり冷戦の崩壊以降に現われてくるいわばリハーサルが1968年に演じられたんだという様なことをいっている学者もおります。おそらくそのリハーサルで試されたことは何かというと、やはり先程千葉先生の方から少しご紹介があった、いわばその近代主義といいましょうか、そのモダニティというか、こういうものに対するある種の根源的な懐疑ということが、少なくとも西側、および中心的な先進国の中で、非常に若者の反乱という形で起きたのだと思います。そのモダニティ、近代主義という中に実は資本主義的なシステムや、あるいは文化だけではなくして、実際のその当時のソビエトを中心とするような社会主義に対するひとつの根源的な申し立てがあったと思います。そして、ご案内の通り、その1968年から約10年後に、私も丁度旧西ドイツにおりましたが、いわゆるイランのシャーの体制が崩壊し、イラン革命が起きました。で、さらにはそれと同じようにして、東側においては過去の韓国のパク体制というものが内部から崩壊いたしました。これはある意味においては60年代の第三世界における、ある種の近代化、モダナイゼーション、そういうもののひとつのモデルが、西と東といいましょうか、まあ中近東ですけれども、そこで事実上行き詰まりを示すという、ま、そういうような状況が1968年から約10年後に現われたわけですね。さらに、西側においてはその1968年からの10年後、1979年に保守党においてサッチャーがいわば党首として現われ、そしていわゆるサッチャリズムというもののある種の実験が80年代から始まってきますし、アメリカにおいてはレーガノミックスが新しい形で始まってきます。それはある意味において、戦後の西側の世界を支配していたケインズ的な福祉国家、その行き詰まりを新しいリベラリズムとそしていわばグローバルな資本という形で乗り切っていこうとする、つまり現在の私たちが今直面している、いわばグローバルキャピタルという時代がこの79年の終りくらいから出てきたわけです。それは明らかに、ポストモダンといっていいような時代の一つの現われだったと思います。そういう中でいわばグローバル

化というものがはっきりと経済や、あるいは政治や文化や社会や、いろいろなところで現われてきました。この中ではっきりいえることは、ある地勢学者の言葉を使えば、「地勢学的なめまい」と、あるいは Geographical Vertigo といいましょうか、要するに自分たちの社会を安定させていた様々な装置や、あるいは様々なひとつのメカニズムというものが大きく再編成をとげざるをえないという時代、というものが現われてきたわけです。それは必然的にアイデンティティという問題をかなり深刻な問題として提起するようになりましたし、さらには冷戦という問題が事実上崩壊していく先駆けになりました。それとともに戦後の50年代を彩ったアジア、アフリカのいわゆる反植民地的なナショナリズムというものが、実はナショナリズムの持っているある種の宿痾というものを同じように再編成、あるいは反復しているということが見えてまいりました。それは、たとえば韓国において、あるいはイランにおいて、あるいはさまざまな第三世界におけるいわば国家主導の開発独裁体制というものが、実はナショナリズムを掲げながら、きわめて国内的には強い抑圧体制というものを一方で引きつつ、そして表装的にはかなり急速度で近代化というものを推進してきました。したがってそれは冷戦の中である一定の役割を果たしたにしても、冷戦が崩壊する中でいわばそのような反植民地的なナショナリズムが持っている問題性というものがいわば第三世界の中からも様々な形で批判的にえぐられるようになった訳です。で、実はそこからポストコロニアルといっていいような様々な文化運動や文芸運動、さらには女性たち、つまりジェンダーの問題というものが第三世界のいろいろなところで現われるようになりました。それはある意味において差異の政治といっていい、つまりナショナリズムというその民族というものだけに回収されない様々な差異というものがいわば、そういう中で立ち現われてきた。で、そういう時代が、今申し上げたようなグローバリズムとともに、進んでいったと思います。そういうようなことをまず一つ現在のグローバリズム、ナショナリズム、あるいはポストコロニアリズムということを考えていくときに、どうしても一つ歴史的におさらいをしておかなければならな

いのではないか。で、さらに私はグローバリズムということを、一つ考えていきます時にこれは必然的に、まあ結論からいいますと、ナショナリズムと決して、ある意味においては、矛盾しない側面といいましょうか、つまりグローバリズムが広がっていくなかで、逆にいわばそのナショナリズムというものがそれと対立しつつそれと同時平行的に現われてくる。ま、こういうような時代に確実に私たちの89年以降の時代はある訳です。その場合に、特別に日本の問題について限定していきますと、実はそういうような時代が実は大正デモクラシー期にありました。これは1920年代、といっていいと思うんですが、1920年代の日本文学、あるいは様々な風俗や、あるいはその当時の思想、文化というものを考えていきますと、これは明らかにある種のアメリカナイゼーション、あるいはアメリカニズムという形でのグローバル化が初めて、いわば第一次世界大戦後の日本のなかに巨大な大衆文化を作り出した時代でもありました。それは間違いなく、日本的なるものというもののアイデンティティがかなり揺らいでいく時代でありました。従って1920年代から30年代にかけて例えば手短に述べますと、哲学においては九鬼周造という人が『いきの構造』をかき、あるいは谷崎潤一郎や、文芸評論家の小林秀雄、あるいは30年代から40年代の日本浪漫派、あるいは、和辻哲郎のある種の“風土”という形での、ある種の一定の日本的な空間の中で限定された一つのアイデンティティ、あるいは時枝の国語研究における発話という問題や柳田国男が発見した郷土という問題、あるいは折口信夫のいう霊界、異界といいましょうか、つまりそういう様々な言説というものは、特殊日本的なるもののアイデンティティをいかにして作り出すか、あるいはそれを発見するかという、いわばアメリカニズムという形の日本に対するインパクトに対する反応だったといえます。で、それはまさしく、この日本のある種のネイティブなものや、あるいは日本の本来性、authentic なもの、あるいは日本の民族や、伝統文化の持っている核心にあるものをもう一度再発見することでした。しかしながらこれは一つのアイロニカルな試みでした。なぜかといいますと、実はナショナルなものの発見は常にそれではないもの、つま

りグローバルなものに媒介され初めてナショナルなものが新たに発見され、場合によっては発明されるということの典型的なパターンをとりました。例えば九鬼周造はその方法論としては、まちがいなくハイデッガーの影響を受けておりました。和辻もまちがいなくハイデッガーに対する一つの対抗として風土論を書きました。つまり実際の日本的なるものの発見はまさしくそれが対抗しようとした西欧的なるもののカテゴリーを通じてしか発見できないという、その意味においては極めてハイブリッドであったわけです。そのハイブリッドなものをナショナルなものとして立ち上げるという、そういうような操作が20年代から30年代にありました。つまり、ナショナルなものというものは実際はそれ自体が純粋に一元的なものではなくして、いわば異種なものとの出会いの中で、場合によっては異種なものを巧みに appropriate といいましょうか、流用することによって逆に自分たちの authentic な、本来的なナショナルなものを立ち上げる、で、こういう操作というものが20年代から30年代にありました。これはおそらく日本が第一次世界大戦後初めて直面した一つのグローバル化の波だったと。やがてそれは国際政治の様々な歯車のなかでご承知のとおり超国家的な日本主義へと向かっていくわけですが、いずれにせよそのグローバリズムとナショナリズムというものはそのような極めてねじれた、あるいは相互媒介的な関係のなかでいわば日本的なるものの発見というものが、いわば20年代、30年代を覆ったということです。その核心にあるものは何であったのか、ということなんですが、これは後でちょっと触れますが、ある文化研究者の言葉を使うと、グローバリズムの中に５つのディメンションがある、その一つはエスノスケープ、エスノというのは人間ということですから、人間の移動、スケープはいうまでもなく風景ですね、つまり人間の風景が変わる、これは移動ということですが、それからもう一つはメディアスケープ、つまりメディアというものがいわば私たちのイメージや、あるいは自分たちのアイデンティティについていわばグローバルな形で様々な発信を行う。そしてもう一つはテクノスケープ、これは技術というものが我々の想像以上にいわばグローバルな形で世界的に拡が

っていく、拡散していく。そしてもう一つはイディオスケープ、つまりイデオロギーというもの。これはある意味においては東欧革命がまさしく西側のある種の考え方というものが、東側の体制を崩壊していく大きな力にもなりました。そのような形でいわばいくつかのこのスケープの変化というものが起きている訳ですね。で、その中で、何が最も問題になっているかというと、それは間違いなくこのナショナルな文化やナショナルな国土、そしてナショナルな主権、そしてその中で培われてきた国民の身体といいましょうか、つまり国民の身体というものはまちがいなく私たちがオギャーと産まれて、言語や、衛生やあるいは様々なこのミクロのいろいろな社会的なネットワークの中で私たちは国民になっていく訳ですね。そもそも国民である、というのではなくして、絶えず国民になっていく。で、そういう形での国民的な身体というものを通じて私たちは自分たちがどこそこのアイデンティティを持った、一つの文化の中に帰属するという一つの自意識を見い出していく訳ですが、あきらかにこのグローバリズムはそのような固定的なアイデンティティを内側と外側から揺るがしていく訳ですね。それはまちがいなく、30年代にもそのような状況がありました。例えばこのハイデッガーという人は“形而上学入門”という論文の中で、ハイデッガーはマルクス主義とアメリカニズムに対する批判、それを意識しながらこういう風に言っている訳ですね。つまり形而上学の観点から見ればロシアもーこの場合には社会主義といっていいかと思いますーアメリカもーこの場合にはアメリカニズム、つまり現在のグローバルスタンダードになっているような大衆消費社会とその文化的な混沌、それらはつまるところ同じである、と。それはテクノロジーの同じ様な荒涼とした狂乱、平均人の同じ様に無制限の組織、地球の最果てまでテクノロジーによって制圧され、経済的な搾取にゆだねられている時代、どんなささいな出来事でも、それがいつどこで起きようとも、思いのままのスピードで世界のどんなところにでも伝達できる時代。フランスでの国王の暗殺と、東京でのシンフォニーが同時に体験できる時代。時間が速度や即時性、つまり即時性っていうことはリアルタイムということですけれども、

あるいは同時性以上のものであることをやめた時代。歴史としての時間がすべての民族の生活から消滅していった時代。そうした時代において、こうした様々なまあ騒ぎというか、それを通して我々の中にまるで亡霊のように次のような問いが出没すると「何のために、どこへいくのか、そしてどうなるのか」、と。これはまあ30年代のハイデッガーの問いな訳ですが、私たちはある種グローバリズムを通じてそのような問いかけを今もまたもう一度せざるを得なくなっている訳ですね。で、そういうことを考えていきますと、例えば今申し上げた形でいうと30年代、つまり満州事変以後、例えば文芸評論家の小林秀雄はまさしく故郷を失った文学というものをエッセイの中で書いております。そのなかで彼は「私たちは生まれた国の性格的なものを失い、個性的なものを失い、もうこれ以上何を奪われる必要があるんだろう」。これはまあ、ある種さばさばした形で、従って小林は一番最後に「我々は一切の夢を捨てて、真に日本的なる伝統を発見しなくてはならない」、というふうに彼は述べております。あるいは小林秀雄とまったく対立的な立場であったマルキストである羽仁五郎という人も故郷なき故郷科学といいましょうか、郷土なき郷土科学、つまり、日本の郷土というものを、我々は失ったが、その奪還を労働者や農民はやらなければならないということを彼は述べている訳ですね。このようにしてヨーロッパにおいても、日本においても、いわば故郷というもの、この故郷という言葉の中には、おそらくハイデッカー的に言うとその Boden と言いましょうか、つまり自分たちが立っているこの地場というものが無くなっていく。で、それはまちがいなくナショナルなアイデンティティやそれを支えている様々な一つの境界というものが、揺らいでいくということに対する一つの文学や哲学、あるいは社会科学のリアクションだったと思います。実際私たちはその冷戦の崩壊後、この30年代的な現象として現われてきたものがもっと複雑な形で現われてきております。で、その現われとしていうまでもなく私たちは人類学者、経済人類学者のカール・ポランニーの言葉を使えば「この市場という巨大な悪魔のひき臼によって全地球的な規模の社会と自然、エコロジーというものが粉々に、い

わば平均化されていくような時代に、私たちは生きている訳」です。そしてこのマーケットのいわばグローバルな暴走に対して、国家も、あるいは超国家的な機関もまだ依然として有効な規制や、あるいはそれに対するノーマルな様々な「タガ」をはめることができなくなっているような時代にあります。で、そういう中でいわばそのメディアというものが、メディアスケープといいましょうか、世界的な形でのメディアにのっかった形でのグローバルな資本の展開、そういうものがアメリカ、イギリスを中心としてこの90年代において、世界をなめつくしていくような時代に私たちは生きている訳です。その中で例えばイギリスのコンサバティブな政治哲学者ですが、例えばジョン・グレイという人はですね『虚妄のあけぼの』の中で「イギリスやアメリカで進んでいる事態は間違いなくこれは中産階級の安楽死である」と。このままいわばグローバルなキャピタリズムというものが、進んでいく場合において、実は社会というもののある種のステビライザーであった、安定装置であった中産階級というものが没落していく、そのことは間違いなく激しいナショナリズムというものを誘発するかもしれない。で、実際にアメリカの現在の中間層の絶対的な所得額というものは低減しつつある訳ですね。なるほど失業率は以前と比べると遥かに良好になっておりますが、中産階級の持っている資産や所得を考えていきますと、少なくとも所得の面においては決してそれは増大していない。そしてかなり膨大な数のいわば貧民というか最下層の人々が、そしてその場合には大抵の人々がエスニックマイノリティである場合が多い訳ですけれども、都市に滞留していくという現象がこれはアメリカだけではなく、あるいはロンドンやイギリスやあるいはヨーロッパだけではなくして第三世界のメトロポリタンにおいても起きております。で、こういう様な形で、ある種の30年代よりもっと進んだ全地球的な規模でのある種の Bodenlos といいましょうか、ま、故郷消失といいましょうか、こういう現象がいわば地球的な規模で起きている訳です。で、そういう中で必然的にいわばナショナリズムというものが一方においては誘発されていく訳で、その一つの例として、非常に日本においていわばそのグローバリ

ズムに対する一つの対抗措置をとらなければならないという、いわば一つのビジョンを出している、これはまあ京都大学の佐伯さんという方の話を少しご紹介したいと思います。要するにこの佐伯さんの言葉を使えばグローバリズムとは要するにアメリカの圧倒的なヘゲモニーである、と。そして、実際のグローバリズムというものは、これは国家の戦略的な仕分けによって生まれてきているのであって、本来エコノミーというものが自由に、国家から自由に動いている訳ではないのである、という考え方です。そして日本がいわば中産階級の安定した社会となり、そして日本のナショナルエコノミーというものを健全に保つためには、彼の言葉を使うと“新しいナショナリズム”、つまり“シヴィックナショナリズム”というものを立ち上げなければならない、と。それは国家というものを仕分けしていく、あるいはそれを主導していく従来のエリートを再建し、そして健全ないわば市民階級のナショナルな意識に基づいた、いわばナショナルエコノミーの再建ということ、それを彼はここで強く言っている訳です。これはまちがいなくある種のアメリカニズムに対する一つの対抗装置というものが彼によって構想されている訳です。そして彼の考え方の背景には、これはなぜサッチャリズムが究極的にはイギリスにおいて労働党によって駆逐されていったのか。それはサッチャリズムは明らかに矛盾する考え方を持っておりました。その一つはいわばネオリベラリズム的なある種のマーケットエコノミーを推進していく立場、そしてもう一つはこれは文化的な保守主義でした。いうまでもなくある種の宗教的な原理主義、あるいは、伝統的な家族のモーレス、あるいは社会的な規制、こういうものを一方で強めていく、そしてさらには国家に対する帰属というものを強めていく。しかしもう一方においては、その国家の一つの役割を限りなく小さくしていくようなグローバルキャピタルというものをすすめていく。これは言ってしまえば、いわばアクセルを踏んで、ブレーキを引くようなものであり、あるいはクーラーをしながら暖房をいれるという、このような矛盾した行為を行わざるを得なかった訳です。で、それはまちがいなくイギリス社会において分裂をもたらしました。それがブレア政権

として現われてきたわけですが、この佐伯さんはまちがいなく文化保守主義の立場で新自由主義に対抗していくという、それがある種いわばナショナリズムの新しい形態として提唱されている訳です。もう一つの対抗措置はこれは国際政治学者の坂本義和さんのいわば世界市場への対抗構想という形で現われているものです。これは一言でいうと、いわばマーケットエコノミーに対するシヴィルソサエティー、あるいはシヴィックステイト、これは間違いなく矛盾した言葉ですけれども、つまり市民による、そして市民がボーダーを超えた形であるひとつのリージョナルな地域的な市民社会のある種のネットワークをつくる、ということです。それは国家というよりはむしろ社会というものにウエイトをおいた一つの対抗構想として考えることができると思います。私自身はこの構想に対して一定限度の了解を示しながらもその市民社会というものが果たして普遍的なものであるのかどうか、この市民社会が間違いなくジェンダーの問題やあるいは様々なエスニックマイノリティーの問題やいろいろな多様性に支えられた社会でありうるのかどうか、それでは市民とは誰であるのか、このような根源的な問が実は70年代の終わりからポストコロニアルという立場で、これはジェンダー論や、エスニシティーの問題やあるいは様々な差異を背負った人々の側からいわば色々な形で提唱されてきました。しかしながら依然としてここには市民社会というものの普遍性のものに、いわば今のグローバルキャピタルに対する一つの対抗措置というものが練り上げられている訳ですし、そしてもう一つにおいてはこの坂本構想のなかにいわば佐伯構想と違ってある種の地域主義というものが、これは先程の言葉で使うとある種のスーパーステイト、あるいは千葉先生の話ではトランスナショナルなものに繋がっていくかもしれません。実はご案内の通り1930年代には東亜共同体構想というものがございました。昭和研究会のブレインであった三木清によって東亜共同体論というものがありました。やがてそれは東亜新秩序になり、大東亜共栄圏になり、三木の考えた日支連携という、つまり日本、具体的には台湾、朝鮮をいれた日本と、そしてその当時の中国とのある種のリージョナリズムを通じてアメリカに対抗

していくという構想は崩壊し、東亜新秩序から、大東亜共栄圏構想という日本を中心とするアジアの一つのヒエラルキーができ上がっていきました。そのような、かつてある種全体主義国家の中でつくられたリージョナリズムが60年を経て今のグローバル化の時代の中で、いわば横の対等な形でもう一度市民社会的なリージョナリズムというものを立ち上げていく。これはある種、歴史というものが違った形で繰り返されるということの一つの現われかもしれません。いずれにせよそこには国家、そして社会という形でのグローバリズムに対する対抗というものが現われている。時間がありませんのでもう一つの対抗として考えられているのが、昨今話題になっているサミュエル・ハンチントンの、これは文明の衝突、つまり文明という国家や社会の規模とは違うかなり広域的な概念を使うことによっていわばグローバリズムに対する一つの回答を与えていこうとする考え方が出ております。しかし私はこのサミュエル・ハンチントンの本を読みますと、実は彼の文明の衝突という考え方の究極にあるモーティベーションは実はアメリカ国内の多元化に対するある種の危惧というものがその根底にあると思います。これはハンチントンはある論文のなかでいわば、マルティカルチュアリズムというものを彼の言葉を使うとカルトといっております。つまりそのようなカルト集団化した多様性というものはアメリカの国益というものを浸食していく、と。それに対する一つの処置としていわば西側の文明、そしてアメリカというものの文化的なアイデンティティを明確にすべし、という考え方を彼は打ち出しているんだと思います。今まあ時間がないということでしたので、最後ちょっと１-２分でまとめますと、私はそのようなグローバリズムの中で社会や国家、そして文明という言葉を使った様々な一つの対抗措置が現われている。それはもう一方において30年代的なテーマを新しい現代的な地平の中でもう一度問い直すような問題群というものを私たちに突きつけている訳です。そこで、私は本当はこのグローバリズムについてもう少しポストコロニアルという観点から述べてみたかったんですが、いずれにせよこれは後で時間があれば私のほうで少し触れますが、そのような様々なリアクショナリー

なものが色々な形でこのグローバリズムと共に出てきつつある、ということ、そしてこのグローバル化がもっているある種のいわば差異を利用しながら、そして資本というものがその差異を構造化しつつ、いわば動いていくという、ある種我々の近代世界の究極的な形態というものが今私たちの目の前で展開されていきつつあると思います。その中で私たちはいったいこれに対してどのような反応をしていったらいいのか、時間がありませんので、後でまたもう少し申し上げますが、一つは私は身体性の問題を、つまり体の問題ですね、これを後で時間があれば一つ申し上げておきたい。そしてもう一つはいわばグローバリズムのなかで最も問題になっているのは家族やあるいはそれにまつわる地域社会や、つまり私たちのコミュニティーやゲマインシャフトという、我々の価値や文化を再生産していく基礎的な単位が非常に揺らいでいるという問題です。で、それは今申し上げた身体の問題とかかわっている訳ですけれども、この問題についてこれから私たちがどのような回答を模索していくのか、そしてそのことがある種のゼノフォビアやナショナリズム、あるいはエスノナショナリズムに陥らないかという形でいかにしてこのグローバルな時代を我々が生きていけるかということの私は回答になるのではないかと思います。残念ながら時間がなくて、その回答については後で時間があれば私のほうで少し申し上げておきたいと思います。